

Jun Koronone's circle "Korononekan" presents
"Aikatsu!" Nono Daichi × Risa Shirakaba Fun Novel



体験版

サキユバスののっち

サキユバス!リサつぺ

R-18
for adult only



Nono Daichi ♥ *Risa Shirakaba*

"Aikatsu!" Girls Love Story

「なまらセクシーなコーデありませんかっ！」

彼女がドアを勢いよく開けて叫ぶと、ドリーデビルのトップデザイナー・如月ルーシーは驚きに目を丸くして、そのまま椅子から転げ落ちた。

「の、ののっち!? どうしたの、急に！」

ぶつけたお尻をさすりながら怪訝そうに言う。ののちと呼ばれたその少女はすぐさま部屋の中まで入ってゆくと、ルーシーに覆いかぶさる勢いで詰め寄り、再び叫んだ。

「セクシーなコーデがほしいんです! くださいっ！」

「ちょ、ちょっと待って! 急に訪ねてきてそれは厚かましくない? まずは落ち着いて理由ぐらい話してよ。ね?」

窘めるようなその言葉に、彼女はやっと少し平静を取り戻したか、息を整える。そして、尻餅をついているルーシーに手をさしのべながら、しおらしく言葉を紡いだ。

「ご、ごめんなさい。突然押しかけたりして」

「それはいいんだけどさ。それで……今日は一人?」

「はい。リサッペには内緒で来ました」

「珍しいね、いったいどうしたの? すごく必死みたいじゃん」

ルーシーに尋ねられて、ののちは表情をどこか不安

げなものに変え、やがて新しいコーデが必要な理由をゆっくりと述べ始めた。

「最近、リサッペのアイカツランキングがなまら上昇してるんです。リサッペが人気になるのはあたしも嬉しいし、いいんですけど……実は今度、二人一組のステージオーディションに出ることが決まって。今のままのあたしじゃ足を引っ張っちゃうんじゃないかって……」

「へえー、意外。ののちって、そんなこと考えるキャラだったんだ?」

「それは考えますよ、リサッペのことなんですから」

ののちはさも当たり前のようにそう答えると、言葉をつけた。

「一緒にアイカツできるのはもちろん嬉しいんです。でも、今のリサッペならあたしなんかじゃなくて他の人と組んだほうがいいんじゃないかって……そのほうがリサッペのためなのかな、なんて考えちゃって。だから、リサッペに見合うような大人の魅力が必要なんです。そのため、なまらセクシーなコーデが欲しいんです!」

感情のこもった言葉が場の空気を震わす。ルーシーはその想いに心打たれると同時に、ののちの中に潜んでいる、ある感情の片鱗を見た気がした。わずかな沈黙の後、薄笑みを浮かべて口を開く。

「つまりののちは、リサッペが他の人に目移りしちゃわないぐらいセクシーなコーデが欲しいってわけね?」

「……………へ? え、ええっと……そういうことなのか

な？」

「だって、リサッペが他の人と組むの嫌なんでしょ？」

「はい……それはそうですけど……」

ののちがその解釈にいささか疑問を抱いているあいだに、あごに指を添えたルーシーは真剣な表情でぶつぶつと何やら考え事を始めた。

「……一緒にいたって気持ち……パートナーへの依存……それでいて、セクシーで……魅惑的な感じの……」

そして、先ほどぶつけたお尻をさすろうとしたその手が一瞬ピタリと止まると、何かをひらめいたようにたちまち表情を輝かせた。

「ハプニングのほうから舞い込んでくるなんて初めてかも！ やっぱりアンタたちって面白い！」

「あの……それってもしかして？」

「うん。良いアイデア、思いついちゃったかも！」

ルーシーはぼんつとののちのお尻を一回叩くと、まるでいたずら好きの悪魔にでもなったように口角をあげて続けた。

「しかも、なまらセクシーなやつ！」

「今日のオーデイション、なまら盛り上がったね、リサッペ！」

ライブ後のステージ裏。あたしは観客の熱気を思い出しながら、隣のリサッペにそう声をかけた。

ずっと気掛かりだった二人でのステージオーデイションは無事合格。それも他の組をぶっちぎってのトップ通過で、観客の興奮度を示す測定システムが振り切れちゃうぐらいのライブにスタッフが驚いたほどだった。

それもこれも、全部このコーデのおかげ。

あたしは先ほどから感じるどこかそわそわしたりリサッペの視線に答えて、その場でぐるんと一回転してみせた。

「びっくりしたでしょ？ ドーリーデビルのニューコーデだよ、リサッペ！」

ルーシーさんに作ってもらった、なんまらセクシーなコーデ。その名も、サキュバス・リリスコーデ。

紫とピンクのグラデーションで、テカテカと光沢のある布地。肩が出ているぶん着衣部分が競泳水着みたいに肌にはびつちりするような着心地で、こういうのをレオタードっていうのかな。アクセサリーとして、先の曲があった二本の角と片方だけの悪魔の羽。そして、まるで生きてるみたい宇宙を漂って揺れる一本のしっぽ。先がハートマークみたいになってて、ちょっとキュートな感じだな

のお気に入り。

「で、でもものっち……その衣装って、ちょっと……その……」

まるで自分のことのように顔を真っ赤にして、リサッペが言葉を詰まらせた。普段は大人っぽくて落ち着いているのに、こんな風に恥ずかしがる時のリサッペはやっぱりめんこいなあ……なんてことを思いながら、言葉の続きを代弁してあげる。

「ちょっとえっちだよね。でもほら、あたしにも大人の魅力が必要かなあ、って思っって」

リサッペはそう言うあたしと視線が合わないように顔をそむけて、胸の前に手を置いた。そのままなぜかもしもじとし始めて、まるであたしの代わりに恥ずかしがってくれてるみたい。そういえばライブ中も観客の視線よりもリサッペの視線のほうが熱かった気がする。そのせいかダンスも普段より色気があって、これも今回のオーデイションがうまくいった理由の一つだった。もしかしたらこのコーデ、一緒にステージに立つ人の魅力も高める効果があるのかもしれない。

「それじゃ、とりあえず着替えよっか？」

二人のあいだに流れてた妙な沈黙を破って、あたしのほうからそう提案する。フィッティングルームにセットしてあったカードを取るうと手を伸ばしたその時、突然背後から何者かに抱きつかれた。

……いや、誰かは確かめるまでもなくわかった。今こ

のステージ裏にいるのはあだし以外に一人しかいない。それにこのラベンダーみたいな落ち着く香りは、あたしにとって間違いようがない人のだったから。

「ど……どうしたの、リサッペ？」

さっきまで落ち着きなさそうにしていたリサッペの少し乱れた息が、耳もとにかかると感じる鼓動も少し早い気がする。肩のあたりに乗せられた顔を横目に確認すると、自然と目と目が合って、なんだかほーっとした感じで見つめられた。

「ね、ねえ……リサッペってば……」

リサッペはなぜかそのままずっと無言で。不自然に続く沈黙に、なんだか今度はあだしの方がソワソワとしてきて目をそらしちゃう。

そして、手持ち無沙汰にさっき取ろうとしていたカードにまた手をのぼすと、今度はリサッペに腕を掴まれてそのままフィッティングルームの壁に押さえ付けられちゃった。まるで、あだしがコーデを解くのを拒むみたい

に。

「ええっと……リサッペ、さん……？」

もうリサッペの行動が理解不能で、されるがままになっちゃう。無抵抗でいるあいだに、正面を向けさせられて、そのまま向かい合わせになった。そして、その両手をあだしが逃げられないように顔の横に立てられる。これっていわゆる、最近流行りの壁ドンってやつだ。

「か、顔近いよ、リサッペ……」

まさか、リサッペに壁ドンされる日がくるなんて！ まったくの想定外だったけど嫌ではない。ただ、顔にかかる息がすぐぐったくて、ちよっと鼻の先がムズムズする。

「もう……——できない……」

そこで、やっとリサッペが口を開いた。微かに体を震わせながら、サキュバス・リリスコーデをつま先から上に向かって順番に眺めてゆく。ちよっと視線が合わさった時、うまく言葉聞き取れなかったあだしが首を傾げると、リサッペの瞳の中で何かが弾けたのがハッキリとわかった。

「もう……我慢できないっ!!」

途端に、顔の横に立てられていた両手が離れたかと思うと、あたしの胸に襲いかかってきた。

「うわぁっ！ なになにっ!? どうしたのリサッペ!？」

あまりにも突然の事態に、あだし、なまらパニック。けど、そんなあだしの気持ちもお構いなしに、そのまま手をベタバタと動かし始めちゃうリサッペ。

「あぁっ、めんこいいい……なまらめんこいよお、ののっち!」

り、リサッペが壊れた!

まるであだしの声なんか聞こえていないみたいには、あはあってしながら、ただひたすらに胸をなでなでしてくる。その触り方が強引なわりに意外と優しく……。

しかもこの衣装、極端に薄い布地だから、なんだか直に肌を擦られてるみたいで、手の動き方とか生々しく伝わってきちゃう。

「あっ、ん……ちよ……ちよっと、こちよばいよお、リサッペ……っ」

思わずそんな声を漏らしちゃう。けど、リサッペの手はいっこうに止まらなくて、むしろあたしの反応を楽しんでいるみたいに動きを早めちゃう。

「ののっちが、いけないんだよ……こんなに、いやらしい恰好してるから……」

そして、そんな言葉と細められた瞳があたしに向けられた。えっ、このコーデ、こういうことせずにはいられないほどのなの？ でも、まさか幼馴染のリサッペに迫られちゃうなんて。リサッペにあたしのこと、そういうふうに見られちゃうなんて。

「り、リサッペの……えっちい……んっ……」

「いいでしょ……減るものじゃないもん……それに、ののちのおっぱい、なまら柔らかいよ……?」

うわぁ、リサッペがおっぱいって言った！ あの普段恥ずかしがり屋なりサッペが、そんな言葉使っちゃうなんて！

驚きの連続の中、それでもリサッペはあたしのおっぱいをべたべたべたべた。おどろきいっぱい、いっぱいおっぱい、って感じ……ああ、ダメだぁ！ なんかさされてるうちにあたしまでおかしくなってきたかもお！

ていうか、なんかあたしもリサッペのこと、なまらめんこく見えてきちゃった。頬赤くして、上目使いで、一生懸命甘えてくる子猫みたいなんだもん。無下に振り払うなんて、もうできないよお。

「はあ……はあ……リサ……べえ……」

手つきもだんだん変わってきてた。さっきまで手を押しつけるだけだったのに、いつのまにか指までもにもよ動きたしてて、もみもみって感じになってる。それにあわせて、なんかあたしまで息があがってきちゃう。

いつもおとなしいのにいざと決めた時は大胆なりサッペが、あたしのことだけを熱烈に求めている。ずっと小さい頃から一緒だったから、言葉にされなくてもわかっちゃう、リサッペの想い。

でもなんだか、こんなの……。

「ののっち、心臓バクバクだよ?」

「り、リサッペのせい……だよお……」

こんなの、初めてで……なまらドキドキしちゃうじゃない！

なんか膝が震えてきちゃった。脚に力が入らなくなってきたフィッティングルームに背中を預けて、リサッペに身を任せちゃう。胸を触られてるはずなのにおへその下辺りがムズムズしてくる。こねるような手つきにあわせて、腰がぐねぐね動いちゃう。

「こんなに肌だして、歌って躍ってたなんて、なまらすごい……脱げちゃいそうとか思わなかった?」

「だ、大丈夫だよ……ルーシーさんが、作ってくれた衣装だから」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、ここはどうなってるの？」

「えっ……ちよっ、んんっ！」

布地と肌の間の溝を指先でなぞられて、身体がぐくぐくしてしちゃう。リサッペはそんな反応を喜ぶように目を細めて、そこに指を潜り込ませようとおっぱいを押し込んできた。

「すっごい……肌に衣装がピッタリしちゃってる……ののっちやらしいよお……」

「そ、その言い方じゃ……あたしがいやらしいって、言ってるみたい……」

「違うの？」

「ち、違うよ……このコーデだって、本当は——」

——もっとセクシーになって、リサッペに追いつきたかったから着たんだもん。

そう口に出しかけたところで、突然胸から全身にかけて痺れるような衝撃が走った。

「——んんんあっ！」

「じゃあ、これは何かな？」

リサッペの指がかすめた胸の中央。そこには小さな鳥が一つずつポツンポツンとできてた。いつのまにか膨らんでたあたしの乳首は、胸を被っている布を盛り上げちゃうぐらい主張しちゃっていた。

「こんなにパツパツな衣装だからこんなにピンピンにし

ちゃってるんだよね。やっぱりいやらしいよ」

「やだリサッペ、そんな言い方……恥ずかしい……」

けど、リサッペはそんなあたしの反応を確かめるみたいに、わざとらしく先っちょだけを何度も何度も弾いてくる。

「はうあ……あっ、あっ、あう……はううっ……」

「ああ……恥ずかしがるののっちって、なまらめんこいっ……！」

いつも恥ずかしがるのはリサッペの方だから、立場が逆転して変な感じ。でも、リサッペは妙に嬉しそうで、この状況を楽しんでるみたい。ぶっくりした二粒を指先で転がしたり、摘んだりしながら、あたしを恥ずかしくさせることに夢中みたいだった。至近距離で顔を覗き込まれる。うわっ、近い……近いよお……

「ののっち、顔真っ赤だよ。どうしちゃったの？」

「うううっ……ひう……リサッペの、あうっ……いじわるうっ！」

でも、あたしも別に見られてることが嫌ではなくて。

……むしろ恥ずかしくなることでリサッペの瞳にあたししか映らなくなることを、心のどこかで嬉しく思っている。身体はそれを素直にあらわすように、びくんびくんって反応しちゃうって。

目を逸らせないまま見つめ合って、そのまま乳首が一度解放される。ひとしきりいじめ抜かれたそこは、もう情けないぐらいツンとたたって、リサッペの指を思い出

してるみたいにジンジン熱くなってきた。

「り、リサっぺえ……」

「そんなに身体くねらせて、誘うみたいにこっち見て……今日のののっち、本物の小悪魔みたい……」

リサっぺは内股気味に身震いしてから、まるで吸い寄せられるようにこちらに近づいてきて、耳元でささやいた。

「……私の知らないののっち、もっと見せて」

背骨を触られて、そのまま背筋をなぞるようにゆくりと手が滑り落ちてくる。腰の辺りに到達すると、あたしは自然と下腹部に力を入れて、次に訪れるであろう快感に身構えた。

けど、そこで手が不自然に止まると、次の瞬間、思ってもみなかった未知の快感が、あたしの全身を突き抜けた。

「あひあっん!!」

自分でも驚くような変な声が口から飛び出して、頭の中が真っ白になる。反射的に口を押さえて、痺れた意識のまま確認すると、リサっぺの手があたしのお尻の少し上辺りから生えたしっぽを掴んでいるのがわかった。

あたし、驚きで思考停止。リサっぺも驚きで見開かれた瞳を向けてくる。

「すごい……そんな声初めて聞いた。もっと聞かせて」
いや、すごいのはしっぽに感覚があるってことじゃないの!? アイカツシステムなまらすごいよ!? けど、

リサっぺはそんなことどうでもいいみたいで、またしっぽを触りだしちゃう。するとさっきと同じ快感が走って、すぐに何も言えなくなっちゃった。くにくにと握られるたび、さっきから疼いてたお腹の奥が、まるでそれと直接繋がってるみたいにジンジンしてくる。頭の中は驚きとスパークの連続で、なんかもうパニックになってた。

「ひうっ、あふあっ、あん、ふああああっ!」

「ふにゃふにゃな顔してる。そんなに気持ちいいんだ?」

「あううっ、きもちいい? これってえ、きもちいいのかなあっ、りしゃっぺっ?」

「なまらびくんびくんしておいて、他に何があるの?」

リサっぺに諭されて、パニック状態の頭はそうなのだど単純に理解しちゃう。そして、あたしは今リサっぺに気持ちいいことをされてるっていう、ただそれだけでよくなる。わけのわからないことは全部気持ちよさで書きしちゃう。そう思ったら、途端にしっぽの先が大きく揺れだした。まるで、素直に喜んでるあたしに反応して、その気持ちを示してるみたいに。

「ののちっちはこんなにしっぽ振っちゃって。あたしに触られて嬉しいんだ?」

「ふえっ!? いや、その……か、勝手に動いちゃうんだもんっ!」

「ふふ、いつのまにこんなえっちな子になっちゃったの?」

「え、えっちなんかじゃ……はううっ!」

特に敏感な先端をつままれると、そのまま下に引っ張られちゃう。膝が抜けると同時に腰がぐんと落ちて、リサッペの前でみっともなく大腿を開いちゃう。恥ずかしさに耐え切れなくなつて目を逸らしたら、今度はしっぽを持ち変えられたような感触がして、そのあとすぐ凄いい痺れがあたしの股を襲った。

「はあううっ！」

「ほら、ちゃんと脚に力入れないと、もつと擦れちゃうよ？」

リサッペはしっぽを二人の股下にくぐらせて、うしろに引っ張つてみせた。まるで一本の綱に二人でまたがってるみたいな格好。

刺激を受けながらもなんとか脚を踏ん張ると、リサッペと同じ目線で見つめ合つた。熱い息が目の前で混ざり合つた。リサッペはもつとそれを感じようとするみたいにしっぽを上の方に引っ張つてみせた。

「はうっ！」

「あうっ！」

必然的に股にしっぽが食い込んじやう。同時に出た声、一緒に歌つてる時みたいにびったりとハモつた。

「んんっ、ふあ、んんくう……！」

「あんっ、ひあ、んんう……！」

しっぽを引っ張り上げるリズムに合わせて繰り返す二人分の声は、なんだか一つの音楽みたいになる。とっても恥ずかしいことをしているはずなのに、リサッペと一

緒だからかな、不思議とだんだん楽しくなつてきてた。

気持ちよさで崩れ落ちてしまわないように、無意識の内に自然と片方の手と手を取り合う。きゅっと握つて、きゅっと握り返されると、なんだか体がビリビリなつてきて、それに同調するように股に食い込んだしっぽが細かく震えちゃう。

「あああん、ののちい……そんなにしっぽ震わせちゃう……んんっ！」

「ご、ごめんっ……でもお……んんんっ！」

気持ちいいから震えちゃうって、震えちゃうから余計気持ちよくなって……もう抜け出せなくなつちゃつた。それに、引っ張るのを緩めないところを見ると、リサッペだつてホントは気持ちよくなって、もうどうしようもないんだと思う。

繋がつてる手と手が汗ばんでくる。それに気づいたら全身もなまら火照つてることに気づいちゃうって、パツパツの衣装と肌のあいだに汗が滲んでくるのを感じた。普段なら気持ち悪いはずなのに、どうしてか今はその蒸れてくる感じがむしろえっちな気分を盛り上げちゃう。

「はあ、はあっ、はあ、ふう……っ」

「はう、んんっ、あう、はう……っ」

しばらくして、しっぽを食い込ませるだけじゃ物足りなくなつた。股がうずうずして、なんか切ない感じ。それが限界に達すると、あたしのしっぽが突然意思を持ったみたいに、シュッと股を擦るように引き戻された。

「あんっ！ の、ののっちいきなりい……！」

「あふっ……ぎ、きもち、いい……！」

一回擦れただけで声が漏れちゃう。リサッペは突然のことにびっくりしたみたいだけど、すぐにまたしっぽを引っ張り直した。必然的に、二回目の甘い痺れが二人の股を通過する。

「んんっ……んくう……！」

「あんっ……ふうん……！」

そこからは自然な流れだった。阿吽の呼吸っていうのかな。何も言わなくても、どうすればいいかわかっちゃった。あたしがお尻の方にクイツと力を入れて、またしっぽをシュッと引き戻す。すると、すかさずリサッペがしっぽをグイツと引っ張り直す。その繰り返しによる摩擦があたしとリサッペの股間を同時に刺激しちゃう。

いわばえっちな共同作業だった。お股を何往復も、何往復も擦り合う。どんどん荒くなる息に、だんだん早くなる動き。腰をくねらせながら、ほとんど無我夢中になっけりサッペと気持ちいいところを目指していく。

「ああん、しっぽお……擦れて、震えてっ……こんなの、気持ちいいよ、ののっちい！」

「うん、しっぽもお股も、なまらいいっ……なまら気持ちいいよお！」

あたしはまだ加減のきかないしっぽの動きにじれったくなって、後ろ手に掴んで摩擦を自分から促した。それに気がついたリサッペもまるで自制ができなくなったみ

たいに動きを容赦のないものに変えた。

「あうっ！ ののっちっ、ののっちい！」

「うんっ！ リサッペっ、リサッペえ！」

もう二本の脚じゃ身体が支えられなくなって、あたしたちは上半身に体重を預け合う。お互いの肩の上に顔を乗せて、耳もとに荒い息を吹きかけあって、ゾクゾクって身を震わせちゃう。リサッペのラベンダーの香りを鼻先に感じて、布の薄い胸部におっぱいの柔らかさと衣装のフリルを生々しく感じた。そしたら、今がライブ後で、ここがステージ裏だったってことを今更ながら思い出しちゃう。途端に、イケないことをしているのだという背徳感が、あたしの快感を一気に押し上げた。

「あああんっ！ なんかきちゃうよ、リサッペっ！」

あたしのなさない声に、リサッペもたまらないように鼻で答える。

「ま、まって……一緒にいいっ、ののっちと一緒にいいよおっ！」

そんな言葉に、嬉しくって胸がきゅんとくる。あたしたちは何をする時はずっと一緒だったから。今までも、そしてこれからも、きつとずつとそうだって信じていたから。

「うんっ！ リサッペと……リサッペと、一緒に……に！」

あたしは体の内側から溢れかえりそうになる正体不明なものを懸命に堪えながら、リサッペがもって気持ちよ

くなれるようにしっぽの先端で背筋をなぞってあげた。

「ああっ、ののっちいそれっ！ それ、なまらずごいい！
あああつ、ああああああんっ！」

途端に、リサッペの声がひときわ高くなって、あたしと同じ何かを堪えるような切ないものに変わった。

そこからは示し合わせたようにお互いにスパートをかける。しっぽの前後運動を激しくさせて、最後に股への締め付けを強めるように、思いっきりしっぽを引っ張り合った。

「あ、あつ、んん、あううっ……ああああつ！！」
「ん、んっ、ああ、んくうっ……んうううっ！！」

二人同時に内股になってしっぽを太股で挟み込む。瘻攀した膝同士がコツンコツンと当たって、その衝撃さえも刺激となって全身に伝わって、指の先までビリビリした。頭の中の何もかもが吹き飛んで空っぽになって、そこに鼻先で香り立つリサッペの匂いと、耳元で奏でられるリサッペの吐息が注がれていった。やがて頭の中がリサッペで満たされると、胸の中が「リサッぺめんこい」って気持ちでいっぱいになった。

「り、リサッペ……なまら、すごかったね……」

そんな感想が無意識に口から零れる。体を少し離してその横顔を確認すると、リサッペはまだ何も考えられないみみたいな様子で、ただ頬を上気させて荒い呼吸を繰り返してた。それを見てたらなんだが愛おしくてたまらなくなつて、頬に頬を擦り寄せる。すると、リサッペはそ

の感触で意識をとりもどしたのか、そのまますすぐあたしの顔を捉えると――

「の……ののっち……」

――まるで夢から覚めた時のうわ言みたいにあたしを呼んで……次の瞬間、真っ赤になってその場から飛び退いた。

「ご、ごごっ、ごめんっ！！」

そう叫んで自分のフィッティングルームに飛び込んでいくと、身に纏っていたコーデをそそくさと解いて、リサッペはそのままステージ裏を凄いスピードで飛び出していた。

「あつ、リサッペ待って！ ……って、もう行っちゃった……」

普段はおとなしいリサッペの俊敏な動きにあっけに取られて、声をかけるのが遅くなった。

待って、なんて言うのはいつもリサッペのほうなのに。一人残されちゃったあたしは、ただ呆然とその場に立ち尽くすしかなかった。そして、なんとなくなつた今起こった事態を順番に、頭の中で整理してみる。

――突然うしろから抱きついてきたリサッペ。

――そして、壁ドン&胸モミ。

――さらに、しっぽを股に挟んでスリスリ。

うん、ありえない。あたしとリサッペが、そんなことしちゃったなんて。

でも、台風みたいに通り過ぎていった体の気持ちよさ

琴ノ音 純 百合小説サークル

ことのね館

